福島県立相馬高等学校
校長通信

Sincerity 02

令和元（2019）年６月２１日

校長　菊田勇雄

けふまでの蕾あすから花ざくろ（鷹羽狩行）

校舎の中庭と馬城会館前にある柘榴（ざくろ）の木が花を咲かせています。柘榴と言えば果実が食用になることは、すぐに思い至りますが、花については余り関心がありませんでした。初夏に鮮やかな朱色の花を咲かせる石榴は、原産地のイランからシルクロードを通って中国やヨーロッパに伝わり、平安時代に日本に伝わったと言われています。柘榴に思いを巡らせていたら、若い頃に行ったスペインのグラナダの町並みが、脳裏に浮かんできました。「グラナダ」とはスペイン語で柘榴を意味し、果実はこの街の象徴として県の紋章にも描かれています。街の至る所で柘榴がデザインされたものを見かけます。私にとってグラナダはアルハンブラ宮殿のある憧れの街。記念に買った陶器の皿は、白地に青と緑で石榴の絵が描かれ、今も書斎の本棚に彩りを添えています。

旧制相馬中学と孫其昌について

校長室には貴重な文化財が保管されていますが、その中でも「教育人材」の扁額は、その存在感が際立っています。なぜなら入室する者すべてが、正面サイドボードの中に掲げられた扁額を目の当たりにし、その雄渾な書体に心が動かされるからです。揮毫した人物の名は「孫其昌」。戦前、満州国の財政部大臣、民政部大臣を歴任した政府高官でした。戦後、親日派の主要メンバーであったことが災いし、中華人民共和国成立後、北京市公安局に逮捕され、処刑されてしまいました。非業の死を遂げた満州国高官と旧制相馬中学校の接点は何か？それを伝える資料は今のところ見つかっていません。現在、私なりに調査を行っていますが、手掛かりはまだありません。分かっていることは、孫が東京高等師範学校に留学したこと、昭和 10 年に来日し昭和天皇に拝謁したこと、岡田啓介首相や高橋是清蔵相と会談したこと等です。扁額には「福島縣相馬中学校」の文字も記されており、学校に贈られたことは間違いありません。旧制相馬中学校と孫其昌をつないだ人物は誰なのか？今後も調査を継続します。

【追記】前号で徳富蘇峰の相馬来訪について触れました。その中で「蒲庭館に一泊」と記しましたが、その後の調査で蒲庭館には立ち寄っただけで、宿泊したのは市内の旅館「伊勢屋」でした。訂正してお詫び致します。

ダルマについて語るときに僕が語ること

相馬ホールに面した３年教室の廊下の片隅にダルマが置かれています。今年は３年生にとって進路決定の正念場。全員が希望する進路を決めて、白目になっているダルマの右目に目を入れることができるように願っています。そもそもダルマの起源は、室町時代に中国から伝わった「起き上がり小法師」であり、江戸時代になると、達磨大師をデザインした起き上がり小法師が作られ、江戸時代後期には縁起物として広まりました。達磨大師は禅をインドから中国に伝えたとして中国禅宗の開祖と呼ばれる高僧です。ダルマが一般的に赤いのは、達磨大師が赤い法衣を着ていたためと言われ、魔除けになると信じられていました。求道者として厳しい修行に打ち込んだ生涯になぞらえ、「七転び八起き」の言葉も生まれています。

私がダルマを見て真っ先の思い出すのは、京都五山の一つ天龍寺の達磨図です。この寺院を拝観する時、必ず庫裏から入り棟続きの方丈へと向かいますが、庫裏の玄関に入ると大きな衝立の達磨図が拝観者を迎えてくれます。迫力のある達磨図を眺めた後、大方丈に歩みを進めると、視界は一気に開け、目の前に夢窓疎石が作庭した曹源池庭園が広がります。池の正面奥にある龍門瀑は、鯉が滝を登る姿を表しています。高校生にとって進路決定は、将来の自己実現のための登竜門です。生徒諸君には、急流にある滝を登る鯉のように、高い目標に果敢に挑戦すること、挫けそうになっても達磨のように、七転び八起きで何度でも立ち上がり最後まで粘り強く取り組むことを期待しています。

【令和の新しい時代を迎えて】

書道室には、随時、生徒諸君が授業で取り組んだ作品が掲示されています。早速、５月１日の改元後、「令和」を題材とした作品が掲示されていました。校舎内のさりげない光景に新しい時代の到来を感じます。令和の担い手はまさしく生徒諸君です。相馬高校での学びを基礎に、逞しく人生を歩んで欲しいと思います。

新生徒会役員の認証式を行いました

６月 14 日、生徒会役員認証式が行われ、先日の生徒会役員選挙で信任された生徒の皆さんに私から認証状を授与しました。６月４日の役員選挙当日は、体育館において立候補者と応援者による立会演説が行われましたが、立候補者一人一人の言葉からは、**「相馬高校を今よりも良い学校にしたい」「生徒会の活動をさらに充実させたい」**という熱意が伝わってきました。また、聴いている生徒諸君は、演説者の挨拶には挨拶で応え、真剣に耳を傾けていました。素晴らしい立会演説会でした。新しく役員になった生徒の皆さん、当選おめでとうございます。役員は生徒会活動の運営の中心であり、まさしく全校生徒のリーダーです。私からは、ピーター・ドラッガーの言葉を引いて、リーダーに求められる要素を伝えました。７つの要素の中でも、特に**①信頼②行動力③コミュニケーション力④誠実**の４つを心がけ、リーダーシップを発揮し、素晴らしい生徒会活動を展開して欲しいと思います。また、生徒会長の中塚亮太君を盛り立て、チームワークよく仕事をするようにお願いをしました。**新しい役員の皆さんの活躍に期待が膨らみます。**

福島イノベーションコースト構想を担う人材育成教育プログラムが始まりました

６月６日、１年生全員を対象に**キックオフセミナー**が行われました。講師に福島イノベーションコースト構想推進機構専務理事の伊藤泰夫氏をお招きし、イノベーションコースト構想の概略や取組事例、福島の高校生に身につけて欲しい５つの力についてお話をいただきました。また、６月 12 日、普通科２年生を対象に**地域理解セミナー**が行われました。講師に県相双地方振興局企画商工部主幹兼副課長の菅野孝氏をお招きし、イノベーションコースト構想の主な拠点とプロジェクト、人材育成の必要性についてお話をいただきました。**本校では本構想に係る取組を通じて、探究活動を積極的に行い、問題発見能力や問題解決能力を身につけさせ、地域の再生・復興の担い手となる人材を育成していきます。**

「折笠晴秀医学博士の幻の絵蘇る　若き日の画帳」より

同窓生列伝②　折笠晴秀（1885-1965）　続編「若きに日の闘病生活を乗り越えて」

前号に引き続き、折笠晴秀を紹介します。明治 36 年に旧制相馬中学校を卒業した折笠は、旧制第一高等学校に入学しました。しかし、その年の秋から翌年の秋までの約１年間、病を得て郷里の小高に帰省しています。17 歳から 18 歳の多感な時期、向学心に燃え上京した前途有望な青年が、学業の半ばで病気療養しなければならなかったのです。その心中を慮れば、察するに余りあります。月日は流れて平成 16 年、折笠の生家の土蔵から、彼自身が描いた水彩画 20 数点が発見されました。これらは闘病中の若き折笠が描いたものでした。平成 17 年、地元で教師をされていた天野史郎氏により、「折笠晴秀医学博士の幻の絵蘇る　若き日の画帳」が刊行されました。折笠が描いた水彩画を見ると、闘病中の彼の心を癒やしたのは、懐かしい故郷の自然や風景であったことがわかります。まさに心の原風景であったに違いありません。病気回復後、学業に戻った折笠は、東京帝国大学医科に入学。卒業後、医師としての地歩を固めていくことになりました。若き日の闘病生活が青年折笠を鍛え上げ、その後の活躍につながったと思われてなりません。

プール清掃の一齣より

校舎を巡回していると、外から生徒たちの歓声が聞こえてきました。窓から声がする方向を覗いてみると、プール清掃の作業中でした。私もプールまで足を運び、様子を見てきました。生徒たちは水の抜かれたプールに入り、デッキブラシで底に付着した緑色の藻を落としたり、汚れた水をバケツや袋に入れたり、ホースの水で藻を洗い流したりしてました。プールサイドではブラシを手にしゃがんで汚れを落としている生徒もいました。体育科の先生方の指導のもと、嬉々として作業に打ち込んでいる姿を見ていたら、心が洗われる気持ちになりました。梅雨の一日、生徒たちの明るい声が曇天の空に響き渡っていました。

清掃作業中の生徒諸君